

コンピュータネットワーク・コミュニティを活用した 「心の教育」に関する研究

M031795 宮地 浩

1. 問題の背景

今日学校現場では、いじめ、不登校、引きこもり、中途退学など様々な問題を抱えている。筆者の勤務する高校では、本校生徒同士が悩みや将来の夢などを語り合える場として電子会議室（フォーラム）をコンピュータネットワーク上に設置して、コンピュータネットワーク・コミュニティを利用した「心の教育」の実践を行っている。

2. 先行研究

これまで、コンピュータネットワークを利用したカウンセリングなど先行研究が行われているが、いずれも相談の相手が専門機関のカウンセラーや同じ不登校生徒であり、また、実施時間が短いなど課題が見られた。その一方で、相談の相手は「友人」が最も多く、つぎに「誰にも相談しない」が多いという先行研究結果もある。

3. 本研究の目的

本研究では、これまで教育実践を踏まえ、電子会議室という1つのコミュニティに見取れる特徴について観察・分析を行い考察するとともに、これらのコミュニティが生徒たちにとって「心の教育」という側面からどのように機能する可能性をもっているかについて検討することを目的としている。

4. 方法

本研究では、心の問題はすべての生徒に起こりうるものとして捉え、インターネット上の電子掲示板を利用したピアサポートシステムとして研究をすすめた。その際、分析対象を高校第1学年320名とし、2003年11月下旬から2004年7月中旬までの期間で実施した。利用者が特定できるシステムを用いることから、どのような者に対して効果があるのか等、性格特性を変数として利用し、心の変化に関する作用について検証した。具体的には、事前アンケートの質問項目として、Big Five 尺度、プライベート空間機能尺度、意見交換の効果を問う項目について集合調査を行った。つぎに、一定期間（約7ヶ月）コンピュータネットワーク・コミュニティ実践を行った後、同じ被調査者に対し、事前アンケートの項目に加え、利用による有効性を探る項目、利用経過後の変化を問う項目、コンピュータネットワーク・コミュニティ実践の感想（自由記述）の調査項目を設定し、質問紙による集合調査

を実施した。

5. 結果および考察

プライベート空間の確保および意見交換の効果に関する調査からは、性格特性が関連している傾向が見出された。中でも、プライベート空間の確保において、内向群が率直なコミュニケーション空間が確保されていないことが確認された。また、内向群は人の意見に対し、受容的態度やその効果を期待する意識が低いこともわかった。しかし、ネットワーク・コミュニティ実践の中では、発言件数や発言文字数、閲覧回数について他群と差もなく利用している様子が伺えた。他者との意見交流や情報の収集・閲覧ができたことは重要な意味をもたらす。内向群の持つ日常のコミュニケーションの特徴と比較して、ネットワーク・コミュニティの中では他群と差もなくコミュニケーションがとられていたという知見が得られたことは、今後の教育指導や本取り組みを深めていく上で有意義であった。発言については、自然発生的に多くの悩みの発言が寄せられていた。しかし、その一方で悪口や冷やかしの発言が指摘されており、情報モラルの学習の徹底・定着が重要な課題として明らかになった。利用経過後の変化を問う項目においては、影響なし群に比べ影響あり群は有意に高い得点が示された。その中において、「友人を大切に思うようになった」「人に思いやりを持って接するようになった」など、影響あり群については、心の教育における「他人を思いやる心」や、「他者との共生や異質なものへの寛容などの感性や心」において影響がもたらされたと言える。また、このことは、コンピュータネットワーク・コミュニティ実践を行うことで、実際の気持ちや行動に変化がもたらされるという大きな知見を得ることができた。感想の自由記述では、「気軽に交流ができる」「楽しかったおもしろい」など肯定的な意見が多く見られ、生徒が本実践を肯定的に捉えていることがわかった。

6. 今後の課題

本研究では、コンピュータネットワーク・コミュニティ実践として電子掲示板の利用について検討を行ってきたが、「電子メールは電子掲示板よりも本心が書きやすい」という研究結果もある。今後は、電子掲示板と電子メールを組み合わせた効果についても検討していきたい。